
清浄と罪の中の等号

羽鳥 紘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清浄と罪の中の等号

【Nコード】

N5986I

【作者名】

羽鳥 紘

【あらすじ】

この世界のどこかには、清らかなる者しか存在しないという 清浄世界 がある。盗みで日々を食い繋ぐ“少年”は、ある夜 清浄世界 から迷い込んだ“少女”を拾うが。

その日少年が眠れぬ夜を潰す為外に出ると、光が視界を塗り替えた。あまりに刹那の出来事は、白昼夢でも見たのかと錯覚させる。いや時間は夜なのだから白昼夢もないだろう。普通の夢か、そう思うには頭はすっかり覚醒している。

ならば稲妻か。月も星も煌々としているのにそれもおかしな話だ。既に夜は普段の静寂と安寧を取り戻し、ただそこに横たわっていた。それでもなかったことにするには光はあまりにも鮮烈で、眠れないのも手伝って少年は光が落ちた場所へと足を向けた。

果たしてそれは夢ではなかった。

そこには光が落ちていた。最初は本当に、光が落ちているとしか思えなかった。屈んで顔を近づけ、目をこすると、人間の少女だと解った。白磁の肌とプラチナの髪が月明かりを受けて輝いていた。恐る恐る触れると、少女が苦悶の声を上げ、びくりとそれを引っ込める。少年の汚れた指の跡が白い肌を汚して、慌てて彼は服で両手をこすった。服も汚いから、あまり意味はなかったかもしれない。その手で再び触れるのはためらわれたが、季節は寒気を運んでいる。少女の服は薄く肌は向きだして、このままにしておけば凍えるだろう。このままにはしておけない。少なくとも常識では。

少年に常識など備わってはいない。だから、助けようと思ったのは理屈ではない。敢えて理由をつけるなら気紛れか戯れ。少年は痩せぎすで歳端もいかなかったが、それでも持ちあがるほど少女は軽かった。襤褸しか触ったことのない手に、少女の服の、絹の感触が滑って行った。

少年は、寒さの凌げるほどちゃんとした家を持たない。定住もしていない。最近のねぐらは、大きな街の貧困街の通りにある空き家

だ。屋根は穴だらけだし、窓硝子は嵌っていない。隙間風だらけで雨が降れば床は濡れる。それでも、通りで寝ころがるよりずっと快適だから、少年はもう長いことここに住んでいる。

少年は少し逡巡したが、一度少女を床に置くと、ベッドの上の埃を叩いた。スプリングが壊れているが床より寝心地は良いと思われる。少年はいつも床で寝ていたから、実際はどうか知らないが。

少年には同居人がいる。血の繋がりなどない。友達でもない。一緒にいるのは似たような境遇で同業者だからだ。今は“仕事”ではない。少年も“仕事”だった。だが事情があつてふいになつた。しかしそろそろ明るくなってくるから、彼も帰ってくるだろう。

「……そいつは 清浄世界 の人間だよ」

帰ってくるなり、同業者は顔を顰めた。

この世界には三つの世界がある。富裕層の住む世界と貧困に喘ぐ者が住む世界、そして清浄世界。前の二つはどこにでも転がっている境はない。後ろひとつは、前二つがある世界とは全く異なるものだ。

「お伽噺かと思っていたよ」

「そういうヤツも多いんだけどな。たまに迷いこんでくんだよ。オレは前に見たことあんだ」

苦汁を吐き出すように、同居人は呟いた。

「関わらない方がいい」

その途端に、少女は目を開いた。美しい銀色の虹彩がこちらを向き、少年も、嫌な顔をしていた同居人までもが釘付けになつた。

「ここは、どこ？」

ゆつくりと頭を持ち上げ、少女が完全に目を開く。そしてゆつくりとかぶりを振り、また寝そべろうとして自分がある場所を見、それもやめると身体を縮めた。

「…… 汚染世界 なのね。私、死ぬのね」

しくしくと泣き出す彼女に、少年の同居人が我に返って舌打ちする。

「追いだせよ。どうせこの世界では 清浄世界 の人間は生きられない」

だが少年は少女の涙に心を拭われていた。らしくもない感情が芽吹いて、ひとつのことを決意する。

「嫌だ。おれはこの子を助ける」

少女はいまにも消え入りそうに透明だった。髪も瞳も銀色で、肌も抜けるように白いから、余計に消えてしまいそうだと危惧してしまふ。

「あの人はどうしたの？ あなたの家族じゃなかったの？」

ひとしきり泣いて、次に少女が落とした言葉はそんなもので、少年は笑ってしまった。

「家族なんかじゃねーよ。うだうだ言うから追い出した。ここはおれが先に見つけたんだ、おれに逆らうなら出て行ってもらおうしかないだろ？」

「……あなたは酷く傲慢なのね」

言って少女は咳こんだ。

「どうした、辛いのか？」

「傲慢は罪よ。清浄ならざるものは、清浄世界の人間を滅ぼすの」

近づけば近づくほどに、少女の息は荒くなる。息ができないのではないかというほど激しく少女が咳こんで、少年は身を引いた。

「……あいつを呼び戻せば、触ってもお前を苦しめないか？」

「寛容は美德です。清浄世界に必要なもの」

少女の言葉の意味はよく解らなかったが、言葉の色で少年は肯定と受け取った。

「あとで捜しに行く。だから飯にしよう」

革袋から固いパンを取り出す。少年にはこれが極上の馳走だった。

だが少女はそれを受け取らなかった。

「清浄世界のお譲様は、こんなものは食えないか？」

「……貧しさが罪なのではありません。貴方はこれをどうやって手に入れましたか？」

先月“仕事”先で失敬したものの残りだった。パンは保存が利くから、飢えたときのために奪って残しておいたとっておきだったのだが。

「強奪は罪です。清浄ならざるものは」

「わかったよ」

その先の言葉を防いで、少年は立ちあがった。

少女の唇が、柔らかなパンを食む。

「お前、どうしたんだよ」

戻ってきた同居人が、驚愕を浮かべてこちらを見た。

「働いて買ったんだ。普通のことだろ」

自分たちが働ける先などない。せいぜい、富裕層の人間の靴を磨いて小銭をもらうくらいしかない。もしやそうしたのかと、同居人は目を剥いた。

「そんなにそいつを助けたいか？ 何故だ？」

「人を助けるのに理由なんていらないだろ」

「……オマエ、大丈夫か？」

何を言っているのか解らないというように少年が見上げてくる。

虚ろだった目がきらきらと光っている。汚れていた手も髪も綺麗になっっている。この寒い季節に水を浴びたのかと、ぞっとする。

「どのみち、オマエにそいつは助けられないんだよ。清浄世界

の人間は、清浄世界でしか生きていけない」

「挑発しても無駄だ。怒りは罪だからな」

穏やかに少年がほほ笑み、同居人はそれ以上の言葉を失くした。

少年は満ち足りていた。

物心ついたときには孤児で、奪い掠め取るしか生きる術はなかった。だからそのことに罪悪感など持てる余裕もなかった。だがあの日、あの少女がそれを教えてくれた。

富裕層を恨んでも豊かにはならない。意地を張っていたって、環境は変わらない。

今までの生活が全て無駄に思えた。

靴を磨かせて下さい、そう頭を下げさえすれば、富裕層は小銭を落としてくれるのだ。こんな気前の良い者たちを、どうして今まで憎んでいたのだろうか。

その小銭でパンを買い、そして少女に分け与える。自分の分などほとんど残らないが、それで少年は満足だった。

自分が人に何かをできる。これ以上の幸せなどあるだろうか。行き場を失くし、死を待っただけだった少女は、自分のお蔭で助かり、そして自分に感謝する。その筈だった。

だが幾ら食べ物を与えても、幾ら正しいと思う行動をしても、少女は一向に元気を取り戻さなかった。

少女は日増しに衰弱し、そしてある夜息絶えた。

「どうしてだ？ 何がいけなかった？ おれの何が罪だった？」

救えると思ったのでしょうか？ それは傲慢です。

少女の言葉はもう声として成されず、嘆く少年には届かない。

(後書き)

短編に挑戦してみました。ファンタジーと言えるのかどうか激しく謎ですが、文学とは言えないですね……。相変わらず自分の書くもののジャンルがわかりません。そして相変わらず言いたいことをはっきり表せません。でもぼんやりくらいが自分らしいんじゃないかとか開き直ってみたりしてます。読んで下さいますありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986i/>

清浄と罪の中の等号

2011年5月19日21時40分発行